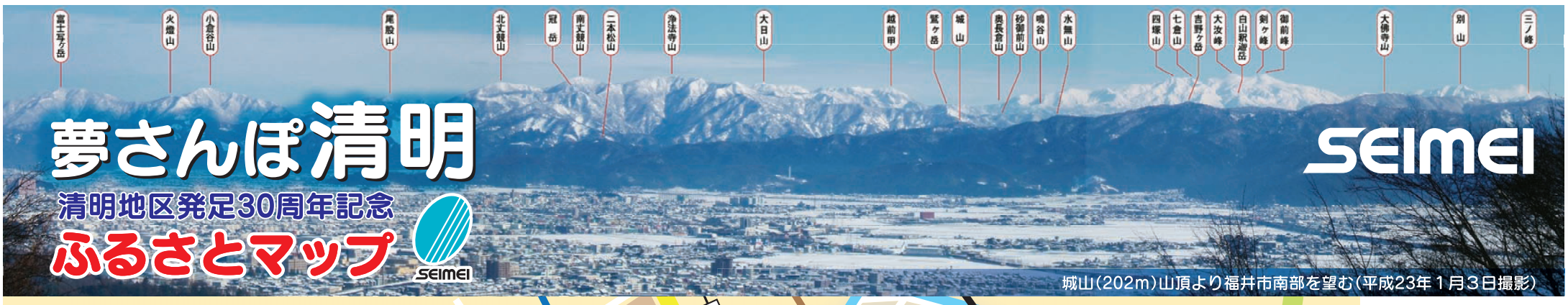

夢さんぽ清明

清明地区発足30周年記念 ふるさとマップ

城山(202m)山頂より福井市南部を望む(平成23年1月3日撮影)

イ～ヌ 看板設置場所(表に詳細)

①～⑳ 石碑設置場所(裏に詳細)

清明の一口メモ (平成24年3月現在)

- 地区創立 30年
- 地区人口 7,563人 発足時 4,943人(昭和57年)
- 世 帯 数 2,697世帯 発足時 1,982世帯(昭和57年)
- 地区面積 4㎢(120万坪) 県立運動公園の約40個分

清明の道の愛称

(平成9年7月制定)

15路線の愛称表示板を製作し、各路線に設置しました。いっぺん歩いてみねの！

清明の花

ベコニア (平成11年4月制定)

丈夫で育てやすく、華麗で力強さを感じさせる花、ベコニア。
清明地区のまち並みをひきたてます。
いっぺんみにきねの！

清明の歌

We Love 清明
(平成13年6月10日制定)

清明地区発足20周年を記念して作成された歌で、清明地区の文化、自然、歴史を網羅したイメージソングです。
いっぺん聞いてみねの！

清明公民館ホームページで聞くことができます。
http://www1.fctv.ne.jp/~seimei-k/

清明の名物

あげごはん

清明の名物「あげごはん」
昔から手軽な行事食として親しまれています。清明産のお米でたいた「あげごはん」は福井一。
いっぺんたべてみねの！

清明地区は福井市の中心部から南へ5㎞のエリアで、江端町、大島町、下荒井町、中荒井町、引目町、杉谷町、今市町の一部で構成され、昭和 57 年、清明小学校開校とともに誕生しました。清明という地名は、明治時代この地に実在した荒井小学校の校訓「忠孝・清明」に由来しています。

清明のシンボルマーク

SEIMEI

(平成7年11月3日制定)

明るくさわやかな清明ブルー、宇宙の広がりをイメージさせる優しい楕円の形状。右肩上がりの4本のシャープなラインは、4つのブロックの協調と発展を表現しています。

ふるさと清明の宝

看板は平成5年、当時の清明小3・4年生が製作したものです。

製作：清明地区まちづくり委員会・誇りと夢わがまち創造事業(平成24年3月製作)　マップの問い合わせ先：清明公民館(38-0043)

清明のふるさとをたずねて

①

御代参祭（江端）
三日月池の湧水では多くの難病が治癒した。昭和７年(1770)越前藩主松平重富の病がこの霊水で平癒したので、翌年禁制札を建て６月15日には歴代藩主の代参が行われ廃藩まで続いた。人々はその日を「御代参祭」として伝えた。

②

玉江の郷（江端）
この地以北は沼地に葦が繁る玉江があり、人々は様々な思いで往来し、数々の歌を残した。芭蕉は「月見せよ玉江の葦の刈らぬ先」藤原俊成は「夏刈りの葦のかりねのあわれなり玉江の月」と詠んだ。

③

栗川荘（江端）
初期荘園の栗川荘は、糞置荘や道守荘等と共に東大寺正倉院文書（天平神護２年・766）に見える。荘園は越前に特に多いが、開田率が低く永続しなかったという。その頃の荘園には、足羽郡の生江臣東人（造東大寺司）が関わったことを伝える。

④

三軒茶屋（下荒井）
八幡神社の前には、上茶屋、大茶屋、中茶屋の三軒があり旅人等で賑わった。その大茶屋では、文久元年に橘曙覧が門人たちと歌を詠み、中茶屋では蓮如上人が布教したが、今も毎年春には、上人の絵像が京都と吉崎を往復の時に休まれる。

⑤

荒井小学校跡（下荒井）
明治５年(1872)学制が敷かれた。寺小屋風から出発した荒井小学校は、翌６年開校し、同11年の明治天皇北陸巡幸では就学率が抜群に高い優秀校と認められた。同校の教育方針であった「清明」は、今の学校名や校区名になった。

⑥

八幡芝原（下荒井）
かつて、この一帯に東西83間、南北140間の原野があり、別れ野とも言った。遠く参勤交代頃から入隊兵士の歓送に至るまで、数々の見送りが行われた。往時の出立は一生の大事であり、人はしばしの別れを惜しみ、様々な哀歓をくりひろげた。

⑦

下荒井遺跡（下荒井）
弥生時代後期の遺跡で、周辺から土師器の壷や高杯のほか須恵器破片が出土したが、その頃この地は豪族が治めたと思われる。魏志倭人伝等に「倭国は百余国が乱立し邪馬台国では卑弥呼が共立された…」と記す時代である。

⑧

荒井一里塚後（中荒井）
一里塚は慶長９年(1604)、江戸日本橋を起点の東海、東山、北陸の三街道に設けた里程目標であり、江戸から132里である。塚のところを土盛したので一里山とも言った。その塚は、西は西鳥羽、北は木田にあった。

⑨

北陸道（中荒井）
古来、北陸道のルートは複数であった。延徳３年(1492) 冷泉為廣卿が「府中から北庄へえばたを通り」と記す道は、天正年間に柴田勝家が新北陸道を定めた道とも重なる。それは親鸞や蓮如、芭蕉、橋本左内も通った歴史の道である。

⑩

親鸞上人旧跡（中荒井）
承元元年(1207)念仏禁止の沙汰が下され、親鸞35歳のとき越後へ配流される途中、ここで休まれ「八房の梅」の伝えを残した。その頃この地を辻の森といい、白山神社や称名寺があったという。

⑪

杉谷遺跡（杉谷）
縄文時代から弥生時代における数千年前からの遺跡である。出土した多くの縄文模様土器は、狩猟から農耕にいたる頃の祭祀や日常品など古代人の暮らしを語る。太古の昔から、この地の山裾には人々が住んでいた。

⑫

杉谷の古道跡（杉谷）
帰雁記（1712）は「杉谷に古道あり」と記す。大宝律令（701）は全国に五幾七道を定め、延喜式（968）は朝津駅など15駅に馬を常置したと記すが、その以北は定かではない。いまも山裾に残す道跡は、その古道であろうか。

⑬

杉谷金山跡（杉谷）
北山には金の鉱脈がある。大正初年から10年近くの間、その鉱石を採掘して大阪方面へ輸送していた。その後、含有量や第一次世界大戦に伴う経済変動等により発掘が途絶えたが、その鉱山跡にはいまも往時の名残をとどめる。

⑭

摩崖佛（引目）
蓮華座に立つ小柄な仏像の彫刻である。像は風化し年代や作者等は不詳であるが、絶えず溢水する北陸道のほかに、この山裾の道を旅する人々の安全を守りつづけてきた。旅僧が刻んだと伝えるこの像は、北陸には数少ない摩崖佛である。

⑮

引目山古墳群（引目）
古墳時代の墳墓で、方墳６、円墳３、前方後円墳等の10基余があり未発掘である。大島山古墳や、安保山古墳を含む麻生津古墳群にもつながる。その頃は、越の国から継体天皇が誕生した時代とも重なる。

⑯

御鷹狩（引目）
引目山から大島山の麓は旧浅水川が蛇行し沼があるなど、その山々と周辺は絶好の鷹狩り場であった。国事叢記（弘化３年・1846）等では、歴代藩主がお鳥見役を置き、鷹狩りをした状況を記す。いまも無心に泳ぐ水鳥に往時を偲ばれる。

⑰

朝六ツ川（下荒井）
朝六ツ川は、かつては浅水川の本流であった。蛇行する同川は、古くから降雨のつど氾濫して人々を苦しめたので、大正13年、徳尾地籍で閉鎖し鯖江の吉江を経て日野川に流し、下流を朝六ツ川とした。数次にわたる改修工事は、明治36年（1903）から昭和 63 年（1988）に至る１世紀に近い歳月を要し、ようやく困難な歴史の幕を閉じた。

⑱

俊寛清水跡（大島）
俊寛僧都は、平家打倒を謀議した鹿ヶ谷の変で平康頼らと鬼界ヶ島に流されたが許されず、あと密かに同島から帰国し大島山の麓に住んだことを伝える。地元では、その住み家近くの湧き水を「俊寛清水」と呼び、ながく伝えてきた。

⑲

大島山遺跡（大島）
この丘陵一帯はもと大島山といい、縄文時代の遺跡や古墳10基余、大豆坂城跡等があった。また落武者佐々木甚兵衛屋敷跡から剣や茶釜等が出土し、萩堂という古寺の地名も残した。今は、それら遥かな歴史のドラマを偲ぶのみである。

⑳

平判官康頼旧跡（大島）
平康頼は、平家打倒を謀った鹿ヶ谷の変に連座し、1177年鬼界ヶ島に流されたが、許されたあと北陸七国の検非違使佐衛門尉としてこの地に住んだ。諏訪八王子神社は、当時の康頼が創建したことを伝える。

歴史のみえるまちづくり … 清明地区の歴史的な遺産を石碑という目に見える形で残す活動をすすめてきました。平成12年に20基完成

清明郷土歴史会・清明公民館